

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12993

研究課題名(和文)理想的観賞者説の改訂・展開による、複合文化的な美的経験論の構築

研究課題名(英文)Revision and development of the ideal appreciator theory to create a multicultural view of aesthetic experiences

研究代表者

森 功次 (Mori, Norihide)

大妻女子大学・国際センター・講師

研究者番号：30720932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、美的経験論・美的価値論における理想的観賞者説を再検討した。検討作業にあたって、ドミニク・ロペスが近年提出しているネットワーク説を補助線とした。本研究の結論は以下の通り。価値観の多様化した現代において、理想的鑑賞者説の説明力は疑わしい。美的価値の規範性は、各美的行為において、どのような能力が発揮され、それが当該のコミュニティにおいていかなる達成として認められているかを念頭におきつつ、判定される必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果として、美的価値論の動向をまとめた論文を発表した。また、近年の美学の多様なトピックを紹介する文献執筆・書籍編集をできたことも、本研究の成果である。さらに本研究の過程では、鑑賞教育(とりわけ「対話型観賞」を取り入れる近年の動向)について、いくつかの執筆および情報発信を行った。こちらの成果は、美学・哲学以外の分野でも大きな反響を呼び、美術館などでの観賞教育プログラムに活用されている。

研究成果の概要(英文)：In this study, I reconsidered the ideal appreciator view in theories of aesthetic experience and aesthetic value. In the research, the "network theory" recently proposed by Dominic Lopes was used as an auxiliary line of inquiry. The conclusions of this study are as follows. The explanatory power of the ideal viewer theory is questionable in today's age of diversified values. The normativity of aesthetic values needs to be judged, bearing in mind what competence is demonstrated in each aesthetic activities and what it is recognized as an achievement in the community.

研究分野：美学・芸術哲学

キーワード：分析美学 美的価値 美的経験 対話型観賞 ネットバレ 理想的鑑賞者 批評 快樂主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

伝統的な美学・芸術哲学は、美的価値や芸術的価値を説明するにあたって、理想的観賞者(ideal appreciator)をモデルとして立ててきた。従来の説では、観賞や判断の基準を説明するにあたって、特定の能力(繊細な知覚能力、美術史の知識、十分な批評経験など)を備えた適格な観賞者を想定し、その者が行なうであろう観賞・判断を正しい観賞・判断としてきたわけである。このような説明手法を「理想的観賞者説」と呼ぶ。

2. 研究の目的

だが、価値観が多様化した現代においてこの「理想的観賞者説」の説明手法は果たして有効だろうか、というのが本研究の出発点・問題関心である。従来想定されてきた理想的観賞者は、あまりに理想的すぎたのではないか。そしてそのために、理想的観賞者説は、われわれ凡人の日常的な判断・ふるまいを説明できない説になってしまっているのではないか? こうした問いが本研究の出発点となる。

しかしその一方で、もうひとつの問題もある。それは、理想的観賞者の想定を安易に捨て去り、各人の美的判断をすべて正しいとするような「何でもあり」の美学理論は、それはそれで使い物にならない、という点である。美的価値・美的行為の理論は、その活動における規範性をきちんと説明できるものでなければならない。「何でもあり」の理論は、それはそれで各種の美的行為や批評などにおける規範的言明の意味を説明できないのである。

本研究は、この問題ぶくみの従来理想的観賞者説を改良し、現代版の新たな美的判断論を構築しようとするものであった。

3. 研究の方法

本研究ではまず、従来理想的観賞者説ではどのような観賞者が想定され、その理論的道具にはどのような役割が担わされていたのか、を検討した。ここでは、ジェロルド・レヴィンソンの一連の論考を参考にしつつ、現代理想的観賞者説の発展を分析した。

また、理想的鑑賞者説の見直し・再検討を進めるにあたっては、ドミニク・ロペス(Dominic Lopes)が近年提出したネットワーク説を補助線とした(Dominic Lopes, *Being for Beauty*, Oxford University Press, 2018)。ロペスの理論は、「観賞」という行為を軸に据えてきた従来美的価値論を刷新し、各種の美的活動の達成を適切に評価できる、あらたな美的価値論を構築しようとするものである。ロペスの理論は、本研究の問題意識にとって大いに参考になるものであり、本研究でもそれを参考にしつつ、批評行為や鑑賞教育などの美的活動を検討した。

4. 研究成果

まず、レヴィンソンやロペスの理論について検討した成果を、いくつかの論文として発表した(以下の論文、「美的なものなぜ美的に良いのか」「われわれ凡人は批評文をどのように読むべきか」)。

またこの研究過程では、その理論を応用しつつ、各種の美的活動を新たな観点から捉え直す試みを行った。とりわけ鑑賞教育(および「対話型観賞」を取り入れた近年の美術館などでの活動)について考察を行い、その成果は公開講座やシンポジウムで発表された(レクチャー「対話型観賞の功罪」、解説記事「美術作品の教材化の功罪」、報告書「ビジネスパーソンのためのアート」)

本の流行と、教育的に注意すべきこと」等)。

また、現代美学の多様性を紹介する書籍を編纂した(『世界最先端の研究が教える すごい哲学』)。

コロナ禍のため当初予定していた作業のいくつかは行うことができなかったが、本研究期間中に取り組んだ翻訳作業の成果は、近々刊行される予定になっている。(ドミニク・ロペス、ベンス・ナナイ、ニック・リグル『なぜ美を気にかけるのか：感性的生活からの哲学入門』勁草書房、2023年夏刊行予定。原著は Dominic McIver Lopes, Bence Nanay, Nick Riggle, *Aesthetic Life and Why It Matters*, Oxford University Press, 2022)。さらに Frank Sibley, *Approach to Aesthetics*, Oxford University Press, 2001 も現在共訳で翻訳作業を進めている。こちらも近いうちにその成果が発表できるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森功次	4. 巻 31
2. 論文標題 われわれ凡人は批評文をどのように読むべきか 理想的観賞者と美的価値をめぐる近年の論争から考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間生活文化研究	6. 最初と最後の頁 365～381
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9748/hcs.2021.365	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森功次	4. 巻 31
2. 論文標題 「ビジネスパーソンのためのアート」本の流行と、教育的に注意すべきこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間生活文化研究	6. 最初と最後の頁 409～419
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9748/hcs.2021.409	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森功次	4. 巻 30
2. 論文標題 芸術作品のカテゴリーと作者性 「なぜ会田誠の絵をVOCA展に出してはいけないのか」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間生活文化研究	6. 最初と最後の頁 457-473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9748/hcs.2020.457	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森功次	4. 巻 49(1)
2. 論文標題 美的なものはなぜ美的に良いのか：美的価値をめぐる快樂主義とその敵	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 86-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森功次	4. 巻 4(2)
2. 論文標題 観賞前にネタバレ情報を読みに行くことの倫理的な悪さ、そしてネタバレ許容派の欺瞞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 76-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 ワークショップ「現象学的美学の系譜」特定質問
3. 学会等名 メルロ＝ポンティ哲学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 専門家の意見はわたしの美的判断にどう関わるのか：理想的観賞者と個人的判断との関係をめぐる現代の論争とその展開
3. 学会等名 第17回一橋哲学・社会思想セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 宇宙開発における芸術
3. 学会等名 宇宙開発フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 芸術的価値をめぐる現代の論争:ロバート・ステッカーの議論を中心に
3. 学会等名 瀬戸内哲学研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 学術的規範の多様性を維持していくということ 美学会の使い方
3. 学会等名 第70回美学会全国大会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森功次
2. 発表標題 レクチャー「対話型鑑賞の功罪:美的知覚の観点から」
3. 学会等名 VTC/VTS日本上陸30周年記念フォーラム2022「対話型鑑賞のこれまでとこれから」(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 川口 茂雄、越門 勝彦、三宅 岳史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 現代フランス哲学入門	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 納富 信留、檜垣 立哉、柏端 達也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる哲学・思想	

1. 著者名 稲岡 大志、長門 裕介、森 功次、朱 喜哲	4. 発行年 2022年
2. 出版社 総合法令出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 世界最先端の研究が教える すごい哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>表現の萎縮に受け手の偏見 あいちトリエンナーレ2019が残した課題 https://journal.ridilover.jp/issues/531 『シン・エヴァ』、優しい「ネタバレ配慮」がネットに溢れる「独特の理由」【ネタバレなし】 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/81119 「あいつり」騒動は「芸術は自由に見ていい」教育の末路かもしれない https://gendai.ismedia.jp/articles/-/67828 あいつり「燃やされた天皇の肖像」「放射能最高！」を批判するなら知っておきたいこと https://bunshun.jp/articles/-/14837 【解説記事】「「アートの価値」を知るための基礎分析」『美術手帖』73(1090) 20-25 2021年9月 「美術作品の教材化の功罪：「ビジネス×アート」における対話型鑑賞が取りこぼすもの」『美術手帖』73(1090) 70-73 2021年9月 【コラム】「新海誠が苦手だ」『フィルカル』Vol.7, No.3 286-296 2022年12月</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------